

学びを生かして、社会とつながり、社会に参画しようとする子どもの育成

小 学 校 檜垣 延久、高市 淳史、品川 崇
研究協力者 鴛原 進、井上 昌善（愛媛大学）

1 主題設定の理由

前期研究において、私たちは、子どもが、社会的事象から学習問題を見だし、その問題の解決に向けて追究することを通して、社会的事象の特色や相互の関連、意味を考えたり、表現したりして、社会生活について理解し、社会へのかかわり方を「選択・判断」しようとする学習を大切にしてきた。

その結果、子どもがこれまでの学びを生かし、社会と自分とをつなげて自己の変容を自覚したり、社会に対する自分のかかわり方を考えたりする姿、つまり私たちが目指す「よりよい社会を形成するために、身に付けた資質・能力を生かし、発揮しながら、社会とつながり、社会に参画しようとする」子どもの姿が多く見られた。一方で、学習材の先にある社会的課題とどのように出合わせるのか、何をどのように「選択・判断」させ、子どもの社会参画を促すのかなど、課題も明らかになった。

以上のことを踏まえ、引き続き研究主題を

学びを生かして、社会とつながり、社会に参画しようとする子どもの育成

と設定した。

2 社会科における「子どもと創る『深い学び』」

(1) 子どもと共に学びをつなぐ社会科の授業づくり

ア 社会科における「深い学び」とは

社会へのかかわり方を「選択・判断」するということは、子どもたち自身を解決すべき社会的課題の中に置き、他人ごとではなく、「自分ごと」として、学んだことを基にかかわり方を考えさせることであると言えよう。そこで、社会科で目指す「深い学び」を、

「自分たちにできることを考える過程で、社会に見られる課題を自分ごととして把握し、学んだことを基に『選択・判断』の場面を通して社会とつながる意識を持つ学び」

と捉え、研究を進めていく。

イ 子どもと共に学びをつなぐ社会科授業

私たちが目指す「深い学び」の実現には、問題解決的な学習過程（図1）を充実させることが不可欠である。問題解決的な学習過程を通して理解したことを前提としない「選択・判断」は、現実味のない、机上の空論に過ぎない。よって、「出会い」「追究」「振り返り」の各場面で、どのように子どもと「学習材」「他者」「自分自身」をつないで問題解決的な学習過程を充実させるのか、そのためにはどのような手立てが有効なのか、探っていく。

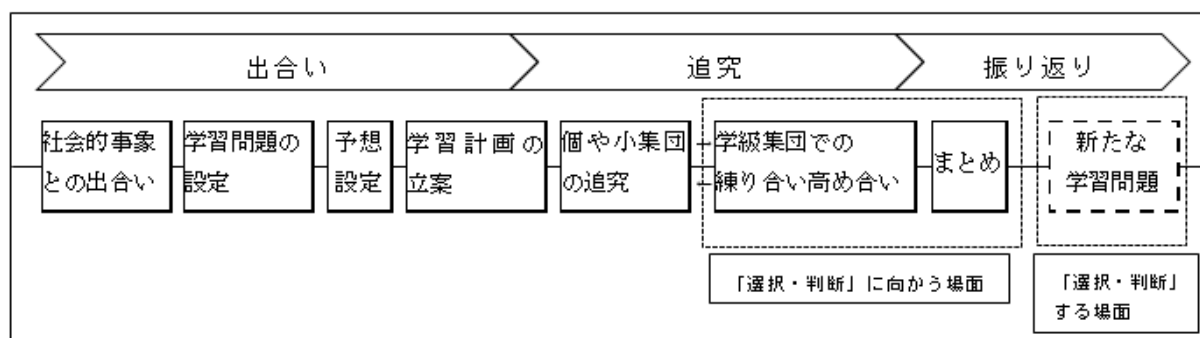


図1 社会科における問題解決的な学習過程

(2) 子どもの学びをつなぐ指導の手立て（学習材・他者・自分自身）

ア 学習材とつなぐ手立て（主に「出会い」の場面）

社会的事象の見方・考え方を働かせる

学習材（社会的事象）と子どもをつなぐときに大切にしたいことは、子どもが社会的事象の見方・考え方を働かせて学習材とかかわり、学習材を自分ごととして捉えることができる場を保障することである。このときに鍵となるのが「問い」である。

次の（表1）は、問題解決的な学習過程における教師の手立てと、社会的事象の見方・考え方を働かせる「問い」とのかかわりを整理したものである。私たちは、特に出会いの場において、子どもがどのような社会的事象の見方・考え方を働かせることが大切なのかを考え、手立てとリンクさせながら価値ある学習問題の設定につなげたい。

ESD、SDG s の視点を取り入れる

子どもと社会的事象をつなぐために、私たちはESD、SDG s の視点を大切に教材・単元の開発・改善にも力を入れる。ESD、SDG s は、両者とも持続可能な社会の担い手を目指すもので、子どもたちが、つながり、参画しようとする社会の在り様と深くかかわると考えるからである。

イ 他者とつなぐ手立て（主に「追究」の場面）

追究する時空間を確保する

子どもが自力解決する時間を保障することで、自分の課題を解決し、確かな理解を積み重ねていくことが大切であることは言うまでもない。しかし、自分一人で追究した成果は、ややもすれば独りよがりなものであるかもしれない。足りない部分があるかもしれない。だからこそ、小集団や学級全体において、他者とつながることで自分の追究成果を見直したり、自分の考えを広げたり深めたりすることが大切になる。そのための時空間の確保に努めたい。

教師が話し合いをコーディネートする

子どもと他者とをよりよくつなぐために必要なものが、「話し合い」である。話し合いにおける教師の役割を大切にする。子どもの意見をつなぐ、問い返す、揺さぶるなど教師が指導性を発揮して話し合いをコーディネートしていくことで、話し合いの充実を図るようにしたい。

ウ 自分自身とつなぐ手立て（主に「振り返りの場面」）

「人」とつなぐ単元を構成する

学習材には、必ず「人」の営みがかわっている。その営みから「人」の考え方や生き方に触れ、自分と比べたり重ね合わせたりすることで、自分自身の社会へのかかわり方を「選択・判断」するよりどころが生まれる。その「人」と一緒に社会へのかかわり方を考えたり、自分たちの考えを価値付けてもらったりすることで、よりよい社会へのかかわり方を考え、参画しようとする意識にもつながる。「人」とつなぐことで、子どもは自分自身とつながり、自分の考えを広げたり見詰め直したりすると考え、単元の中で子どもと「人」をつなぐ場面を設定する。

話し合いのテーマを大切にする

これまでの学びを踏まえ、子どもが自分自身の社会へのかかわり方を「選択・判断」する場面で大切にしたいことは、話し合いのテーマ設定である。テーマを設定するときは、①子どもの意識に流れに沿っており、話す必要があるものか、②学んだことを基に根拠を持って発言できるものか、③未来の自分自身とつながり、かかわり方を考えることができるものかという点に、特に留意する。

社会科日記（学習感想）を活用する

過去、現在、未来の自分自身とつなぐために、「社会科日記」を活用する。その際、それぞれの場面において適切なテーマを設定することで、子どもが自分の成長や変容を自覚することができるようにする。特に、未来の自分自身とつなぐ「振り返り」の場面では、これからの社会へのかかわり方を「選択・判断」したことが記述に表れるようなテーマ設定を考えていきたい。また、「何を学んだか」「学習計画を基に、どのように学んできたか」というように、発達段階に応じて社会科日記の項目を立てて活用することも視野に入れたい。

表1 学習過程における教師の手立てと、社会的事象の見方・考え方を働かせる「問い」

学習過程における教師の手立て	社会的事象の見方・考え方を働かせる「問い」
出会い 社会的事象との出会い ・意外性を感じる学習材を提示する。 ・感じたことを紹介し合い、自分と他者との思いの共通点や違いに気付く場面を設定する。 学習問題の設定 ・社会的事象や他者とのかかわりの中で、今までの自分の認識や経験を問い直し、問題意識を持たせる。 予想設定、学習計画の立案 ・個々の直感や生活経験、既習事項から予想を立て、話し合う。 ・個々の問題意識を明確にするために、整理・分類したり教師が揺さぶりをかけたりする。 ・問題解決の方法について見通しが持てるようにする。	社会的事象の様子や特色を捉える 位置や空間的な広がり ・「どのような場所にあるか」 ・「どのように広がっているか」 時間や時期の経過 ・「いつから始まったのか」 ・「どのように変わってきたか」 事象や人々の相互関係 ・「なぜこのような方法を取っているのか」 ・「どのようなつながりがあるのか」
追究 個や小集団の追究 ・様々な社会的事象とかかわる場をつくる。 ・個々が十分に追究できる場や時間を保障する。 ・追究成果を分かりやすく表現できるような言葉や表現方法を選択する場を設定する。 ・自分の追究成果を見詰め直す活動を設定する。 練り合い高め合い ・話し合いのテーマを精選したり、思考ツールを活用したりするなどして、教師のコーディネートにより話し合い活動を充実させていく。 ・練り合い、高め合いの場で得た成果や疑問を基に、自分の考えの再構成を図る場を設定する。	社会的事象の特色や意味を考える（考察） 比較、分類、総合する。 ・「どのような共通点があるか」 ・「どのような仕組みと言えるか」 地域の人々や国民の生活と関連付ける。 ・「なぜ必要なのか」 ・「どのような役割を果たしているのか」
振り返り 個なりのまとめ ・問題解決的な学習の過程の道筋に沿ったまとめをさせる。 ・社会的事象の見方・考え方を働かせた振り返りをさせる。 新たな学習問題 ・社会へのかかわり方をまとめるために、社会に見られる課題を把握し、その解決にどのようにかかわるか選択・判断したことを社会科日記にまとめさせる。	社会へのかかわり方を考える（構想） 子どもが社会への自分たちのかかわり方を選択・判断する ・「これからはどのように続けていくべきか」 ・「自分たちはどのようなかかわり方ができるか」
「自分たちにできることを考える過程で、社会に見られる課題を自分ごととして把握し、学んだことを基に『選択・判断』の場面を通して社会とつながる意識を持つ学び」	

(3) 「子どもとつくる『深い学び』」における評価

ア 評価の視点

私たちは、社会科において目指すべき子どもの姿とは、よりよい社会を形成するために、身に付けた「資質・能力」を生かし、発揮しながら社会とつながり社会に参画しようとする姿と捉えている。つまり、①「資質・能力」が子どもにいかに身に付いたか、②子どもが社会とどのようにつながり、参画しようとしているか、この二つの視点で評価する必要があると考えている。①は子どもの学びを時間軸、空間軸で見取り、評価を積み重ねていく。②は社会科日記を活用する。子ども自身に何が身に付いたか、どう学んだか、学びをどのように生かそうとしているのか、振り返りの時間を大切にしていきたい。

イ 評価の具体的な手立て

① 「資質・能力」が子どもにいかに身に付いたか

先述のとおり、学習のめあてに対する自己評価に社会科日記を用いる。本時の学習を振り返る時間を必ず確保し、個人や学級全体で、次時の活動への見通しを持てるようにする。単元中における主に見取る場面は「出会い」「追究」「振り返り」の三つの場面であり、それぞれにおいて記録していく「社会科日記」の記述の変化（進化・深化）や活動時のつぶやき、ノート記述や学習後の成果物、写真・動画の記録などから、「資質・能力」（「知識・技能」「思考・判断・表現」）がいかに身に付いたかを総合的に見取る。

また、「主体的に学習に取り組む態度」の一側面である「主体的に問題解決しようとする態度」については、「出会い」「振り返り」の場面の社会科日記の比較・検討を行い、予想や学習計画を生かし、見通しを持って問題解決できたかどうかを振り返った記述を見取る。

② 子どもが社会とどのようにつながり、参画しようとしているか

現実的な「選択・判断」をする中で、「社会に見られる課題」の多様性や複雑さを「自分ごと」として捉えた時に、子どもは社会とのつながりを実感し、未来への明るい展望を描くはずである。つまり、子ども自身が行った「選択・判断」が、どのように社会とつながり、参画しようとしているかを見取ることが重要になってくる。これは、「主体的に学習に取り組む態度」のもう一つの側面「学習したことを社会生活に生かそうとする」態度にもつながるものである。ここで大切にしたいことは、社会へのかかわり方を「選択・判断」した子どもの姿を具体的に想定しておくことである。私たちが単元のゴールイメージをしっかりと持つておくことが、「深い学び」の実現につながると考える。

同時に、社会とつながり社会に参画しようとする子どもとして、現実社会に生きる様々な人たちに、自分たちの学びを評価してもらうことも大切である。自分たちだけで考えたことの非現実さを修正してもらったり、一緒に悩んでももらったりすることが、社会の課題を自分ごととして捉え、社会とつながり、参画しようとする姿になるのではないだろうか。

（高市 淳史）